

〈巻頭言〉

## もう一つのパラダイム ——連続観と非連続観を超えて——

学 長 本多 正昭

私は最近、カントが『純粹理性批判』の中で列挙している理性の二律背反アンティノミーの中には、近代科学そのものの根本的な不安定性を示唆するものがあることに気がついた。次のようなアンティノミーである。

テーゼ：自然の一切のものは、単純要素（不可分割者）から成っている。

アンティ・テーゼ：単純なものは何も存在しない。一切は合成されている。

テーゼによれば、世界はこれ以上分割できない粒子から成っている。従って粒子Aと粒子Bとは、決して一続きにはならない。絶対の分離、絶対の非連続なのである。

他方、アンティ・テーゼによれば、これ以上分割できない粒子など存在しない。世界は一つの織物のように、本当は一つ一つの小さな粒も、全部が連続しているのである。

一体、どちらが正しいのか。天才少年ブーバーは、実に14才のとき、このような二律背反に直面して、自殺寸前にまで追いつめられたということである。

人間の認識の枠組には、一応、連続観と非連続観の二つが存在するといえよう。世界の創造者である神は、有るのか、無いのか。宇宙の限界は、有るのか、無いのか。これも連続観と非連続観の問題に帰着する。一体、どちらが正しいのか？ それはかく問う理性自身、ついにこれに答えることが出来ないのである。

さて近代科学の進歩は、物質界を構成する究極的単純要素（不可分割的・非連続的粒子）の、無批判的ともみえる探求の歴史であった、と云えそうである。というのは、この実証的科学の進歩の誘因は、世界は単純要素から構成されているという、それ自体はけっして実証されない、従って単なる仮説への盲信にあったからである。何とも奇妙な話ではある。しかし、ここにこそ、「近代」なるものの根源的病理が隠されていたのではなかろうか？「近代」科学が誇る形式論理的客観性や必然性は、一見有無を云わさぬ〈自他非連続的〉強制力を持つものである。この意味で、まさしく知は力であった。決して愛ではなかったのである。かくして近代科学は、日毎に威力を発揮して、何よりもまず今日の技術文明を構築してきた。それはさらに、経済力とも軍事力ともなり、また精神分析や法的支配ともなって、持たざる者、持たざる国々に、圧倒的な力で君臨するにいたったのである。しかし、そこには初めから大いなる<sup>かんせい</sup>陥穽が隠されていた。この種の力は、根本的に甚だ不安定なもの、抽象的な一面観の部厚い仮面にすぎなかったからである。

われわれは、形式論理・対象論理のみが、ひのき舞台を支配しているような組織内人間関係にも、本質的には同様の状況、つまり人格疎外的状況が存在することを、容易に見抜くことが出来るであろう。

さて砂漠の民にとっては、神は絶対の他者であった。被造物との関係は絶対の非連続であった。人間と砂漠は、非連続的で単に対抗的なものとみえていたからである。しかしこの砂漠に、緑の連続性をもたらしたのは、神の子の受肉であった。野に咲く花のいのちに人々の心に向けた人の子イエスは、単なる絶対の他者としてではなく、あの時代、あの地方の言葉で、親しく神の愛を人々に語られたのである。

単なる非連続観からは、まだ本当の神の愛は示されなかったのである。しかし他方、単なる連続観からも、真の愛は出て来ない。イエスには、ペトロをさえ断固として斥ける仮借なき非連続観が生きていた。具体的

な愛は、連続観と非連続観、母性原理と父性原理の、不一不異的相即の世界であると云えないであろうか。

ともあれ、砂漠の民の歴史を背負ったキリスト教は、牧場の民・ヨーロッパへ伝えられ、そして今日、いわゆるモンスーン型東洋の連続観的文化の国・日本にもその福音を伝えつつある。「聖泉短期大学はキリスト教の精神に基く教育・研究の場である」と、入学式などで告げる時、私の胸裡を深くよぎる想いは、実は連続観即非連続観的、不一不異的な人生観・世界観としての、新しいキリスト教的パラダイムなのである。私はこのパラダイムに基く聖泉学体系の出現を期待している。